The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 意志・推量形式「べー」の対照 : 用法変化の推論 |
| Author(s) | 舩木, 礼子 |
| Citation | 待兼山論叢. 日本学篇. 1999, 33, p. 17-31 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/56553 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 意志・推量形式「ベー」の対照

## ── 用法変化の推論 ──

舩木　礼子

## 1. はじめに

本稿は、現代の日本語諸方言にみられる意志・推量形式「ベー」[1)] を対象とし、さまざまな角度から対照することによって、モダリティ形式の変化過程について考察するものである。「ベー」を取りあげるのは、現在も東日本に広く分布するだけでなく西日本にもわずかに使用が確認される形式であるうえ、方言ごとにその用法にちがいがみられるという点で対照にたえるものだと判断したことによる。本稿では特に、井上（1985）、瀧川（1998）などで述べられた「ベー」の接続の単純化（終止形接続化）に基づく「終助詞化」だけでなく、「行こうベー」のように「ベー」が真正モダリティ形式「ウ/ヨウ」に後接する例がわずかながら存在することを報告し、分析化（推量表現と意志表現の形式分化）以外にもさまざまな変化パターンが考えられることを中心に述べる。

## 2. 調査地点および調査の概要

### 2.1. 意志・推量形式「ベー」の分布

よく知られていることだが、地域によって「ベー」のもつ用法は異なる。確認のために『方言文法全国地図』などの既刊の方言地図をまとめると、３つの特定文脈（推量表現、意志表現、勧誘表現）における「ベー」の分

布および使用パターンは表１～２のようになる[2)]。

**【特定文脈】**

・文脈１(推量表現)：質問文「あいつはたぶん手紙を書くだろう」

・文脈２(意志表現)：質問文「手紙を書こう」とつぶやくとき

・文脈３(勧誘表現)：質問文「いっしょに行こうよ」

**【表１　特定文脈における「ベー」の使用パターンと使用地域】**

| パターンⅠ | 使　用　地　域 | 文脈１(推量表現) | 文脈２(意志表現) | 文脈３(勧誘表現) |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ-ⅰ | 福島･山形（庄内を除く）･宮城、沼津市 | ○ | ○ | ○ |
| Ⅰ-ⅱ | 新潟県南越南部 | ○ | ○ | × |
| Ⅰ-ⅲ | 秋田県（由利郡を除く） | ○ | × | ○ |
| Ⅰ-ⅳ | 長野県下水内郡栄村 | ○ | × | × |
| Ⅰ-ⅴ | 北海道静内郡静内町・（※沼津市） | × | ○ | ○ |
| Ⅰ-ⅵ | 該当地域なし（※稲美町） | × | ○ | × |
| Ⅰ-ⅶ | 新潟市松浜町 | × | × | ○ |

○：「ベー」類を使用。　×：「ベー」類不使用。

**【表２　特定文脈における「ベー」・「ベー」複合形式の使用パターンと使用地域】**

| パターンⅡ | 使　用　地　域 | 文脈１(推量表現) | 文脈２(意志表現) | 文脈３(勧誘表現) |
|---|---|---|---|---|
| Ⅱ-ⅰ | 関東地方一円 | ダンベー | ベー | ベー |
| Ⅱ-ⅱ | 秋田県北部・青森県西部の一地域 | ビョン | ベー | ? |
| Ⅱ-ⅲ | 岩手県 | 終止形＋ベー | 未然・連用形＋ベー | ? |

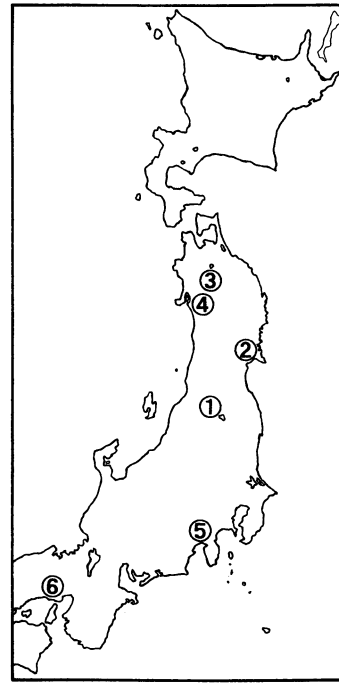
?：既刊の地図では確認不可能。

ただし、既刊の地図で示された「ベー」使用地域と現時点のそれとは一致していないこともありうるという点に留意する必要がある。例えば、パターンⅠ-ⅰとされている静岡県沼津市は近年、意志表現および勧誘表現にしか「ベー」を使用していないため、現在は※で示したようにパターンⅠ-ⅴとみなすべきであろう。

## 2.2. 対照する方言

以上のことをふまえ、本発表で取りあげるのは図1に示した6地点である。以後、各方言を以下の①～⑥の番号と下線部分で略して呼ぶ。

【図1　調査地点】




**【調査地点】**

①福島県喜多方市：パターンⅠ-i

②宮城県桃生郡鳴瀬町：パターンⅠ-i

③秋田県大館市：パターンⅡ-ii

④秋田県南秋田郡五城目町：パターンⅠ-iii

⑤静岡県沼津市：パターンⅠ-v

⑥兵庫県加古郡稲美町[3)]：①～⑤とは用法が著しく異なっているため既刊の方言地図には現れないが、意志表現においてのみ使用される点ではパターンⅠ-viに相当するといえる。

なお対照は、以下の調査によって得たデータをもとに行っている。

**【調査概要】**

調査方法：面接調査（適格性判断および方言翻訳）。また自然談話中の用例も採取。ただし、⑥稲美についてはインフォーマントの都合により、電話および手紙による通信調査のみ。

調査期間：1997年6月～1998年11月。

被調査者：各地点生え抜き男女1～3名（60～80歳代）。⑥稲美のみ90歳代男性1名。

## 3. 対照

以下では、接続面の特徴（3.1.）、用法面の特徴（3.2.）、および終助詞的用法の有無とその特徴（3.3.）の3点について、各方言の「ベー」を対照する。

なお、例文は考察に必要と思われる部分のみカタカナと下線で示し、それ以外の部分は意訳した標準語で記す。また、*は文法的に不適格な作例、#は運用上不適切な作例であることを示す。

### 3.1. 接続面の特徴

接続面については以下のような特徴が指摘できる（表3参照）。

**【表3 「ベー」の接続】**

| | ①喜多方②鳴瀬③大館④五城目 | ⑤沼津 |
|---|---|---|
| 動　詞　一段動詞 | 終止形 | 未然・連用形 |
| カ変動詞 | 終止形 | 未然形／終止形 |
| サ変動詞 | 終止形 | 未然・連用形／終止形 |
| 四段動詞 | 終止形 | 終止形 |
| 形容詞 | 終止形（イ語尾） | ― |

―：「ベー」は後接しない。

動詞については、①喜多方、②鳴瀬、③大館、④五城目の「ベー」の場合、「～ンベー」や「～ッペー」を動詞のル語尾が撥音化・促音化したものとみなすなら、ほぼ終止形接続になっているといえる。形容詞についても、①喜多方、②鳴瀬、③大館、④五城目では「高いベー」のようにほぼ終止形（イ語尾）接続となっており、「高カンベー」「高カッペー」などのカリ活用連体形は、老年層である被調査者でも古い形式としてほとんど用いないと回答している。このように接続の単純化がすすんでほぼ終止形接続だけになっている点は、井上（1985）や瀧川（1998）の指摘するところ

と共通している。

⑤沼津の「ベー」は、一段活用動詞には未然・連用形（語幹）接続、五段動詞には終止形接続であり、またカ変動詞には「コベー」「クルベー」、サ変動詞には「シベー」「スルベー」「スベー」を併用している状況にある。ここでは、終止形への一本化という単純化の傾向がはっきりとは認められない。

一方、現時点で確認することができた唯一の西日本の例である⑥稲美の「ベー」は、東日本の「ベー」の接続のしかたとは著しく異なっており、意志の助動詞「ウ/ヨウ」に後接するパターンと、動詞の終止形に後続するパターンとの二つをもつ。前者のパターンの「ベー」は、「ウ/ヨウ」以外には後接しないという特徴がある。

(1)　あっちへ行コウ｛ベー/ベシ｝（あちらへ行こう）

(2)　*あっちへ行ク｛ベー/ベシ｝。

また⑥稲美の後者のパターンの「ベー」は、動詞終止形に「ベシ」（この場合「ベー」は用いられない）が後接するが、「ベシ」で文が終了する場合は不適格と判断される。以後、この用法を「非文末の「ベシ」」と呼ぶことにする。

(3)　今日は自転車で行クベシだった。（行くつもりだった/行こうと思っていた）

(4)　*今日は自転車で行クベシ。

### 3.2. 用法面の特徴

次に、各方言の「ベー」の用法について対照する。各地点の「ベー」の用法は詳細に見ていくとさまざまなちがいが確認されるのだが、紙幅の関係上、本稿では以下の（a-1）～（b-4）の例文に相当する用法についてのみ対照することとする。例文は以下の通りである。

**【対照する用法の例文】**

(a) 推量系の表現

(a-1) 推量：あの人はたぶん明日のお祭りに行クベー。

(a-2) 確認要求：おまえも当然、お花見には行クベー。

(b) 意志系の表現

(b-1) 意志：〈独り言で〉ああ、もうこんな時間だ。もう｛寝ンベー/寝ベー｝。

(b-2) 申し出：〈缶のふたが開かないという相手に〉どれ、かしてごらん、私が｛開ケテミンベー/開ケテミベー｝。

(b-3) 勧誘：明日のお祭り、一緒に｛行クベー/行クベージャネァカ｝。

(b-4) やわらげた命令[4)]：〈自分はまだ起きているが孫には寝てほしい場合に、孫に対して〉○○ちゃん、もう寝ンベナー。

これらの用法の対照結果は、表4のようにまとめられる。

**【表4 「ベー」の用法】**

| 用法 | | ①喜多方 | ②鳴瀬 | ③大館 | ④五城目 | ⑤沼津 | ⑥稲美 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | (a-1) 推量 | ○ | ○ | ○ | ○ | ― | ― |
| | (a-2) 確認要求 | ○ | ○ | ○ | ○ | ― | ― |
| b | (b-1) 意志 | ○ | ○ | ○? | ― | ○ | ○※ |
| | (b-2) 申し出 | ○ | ○ | ○? | ― | ○ | ― |
| | (b-3) 勧誘 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ― |
| | (b-4) やわらげた命令 | ○ | ― | ― | ― | ― | ― |

○:「ベー」使用　―:「ベー」不使用　?:ゆれがある。

①喜多方の「ベー」の用法は最も広く、推量表現系・意志表現系の双方にわたっている上に（b-4）のやわらげた命令用法がある。一方、②鳴瀬の「ベー」は①喜多方とほぼ同じ用法をもっているが、(b-4) のやわらげた命令については、自然談話として採録できた（5）のような一例を除き、適格性判断ではすべて不適格とされた。

(5)　〈幼い子が違う所へ行こうとしているのを見て〉ソッチー　イガネベシー。

このことは、(b-4) のやわらげた命令が運用的な拡張された表現であるために、②鳴瀬では内省しにくかったものと考えられる。

表4では、表の右側の方言ほど用法が狭い。特に二重線より右の⑤沼津では意志表現系のみ、⑥稲美では意志表現系のうち極端に限られた用法でのみ「べー」が用いられていることがわかる。なお、(a) の推量系の用法をもたない⑤沼津の「べー」は、引用でない限り、当然のことながら従属節では用いられない。

表4で⑥稲美に※を付けているのは、当該地域の「べー」を (b-1) の意志用法に分類してはいるが、①〜⑤の「べー」とは性格が異なっているからである。以下、⑥稲美の「べー」のうち、動詞終止形に後接するパターン（非文末の「ベシ」）について詳述したい。

⑥稲美の「べー」は、動詞終止形に後接し、文末（文の最も右）に位置しない場合、「べー」は使用できず「ベシ」が用いられる。

(6)　行クベシだったけど、…（行くつもりだったけど）

(7)　*行クベーだったけど、…

この「ベシ」は「〜と思う」と共起しない。この点で、標準語の「スル｛ツモリ/考エ/所存｝ダ」が「〜と思う」と共起しないのと同様に、心内発話として引用することができない、聞き手めあて性の強いものであることがわかる。

(8-a)〈標準語〉〈独り言で〉そろそろ｛*行くつもりだ/行こう｝。

(8-b)〈⑥稲美〉〈独り言で〉そろそろ｛*行クベシ/行コウ｝。

(9-a)〈標準語〉｛*行くつもりだ/行こう｝と思ったけど、…

(9-b)〈⑥稲美〉｛*行クベシ/行コウ｝と思ったけど、…

ただし留意すべきは、⑥稲美の文末の「ベシ」は非文末の「ベシ」と性格を異にしており、独り言のみに使われるもの、すなわち聞き手めあて性

が希薄だという点である。先の（8-b）と、文末の「ベシ」の用例である（10）とを比較せられたい。

（10）〈⑥稲美〉〈独り言で〉そろそろ｛行コウベシ/行コウベー｝。

こうした文末の「ベシ」については、3.3.1.に記述する。

また、（11）の「気が向いたら～」と「ベシ」との共起関係からわかるように、「ベシ」は「～なければならない」に相当する当為の意味を担っていない。（12）のように当為の意味を含んだ文脈は不適格と判断される。

（11）気が向いたら公民館に行クベシだったんだけど、結局気がのらなかったので行かなかったんだ。（気が向いたら公民館に行くつもり/行く気だったのだけど）

（12）＊〈ある仕事を、代わりにやってあげればよかったと言われて〉いやいや、やはりあれは私がやるベシだったんだ。（やるべきだった/やらねばならなかった）

さらに、「ベシ」は二人称の意志、三人称の意志を表すこともない[5]。

（13）＊あのお花見には、おまえも行クベシだったのか？（行くつもりだったのか？）

（14）＊あの人、今度はちゃんと行クベシだったのに、おなかが痛くて遅れたんだって。（あの人は行くつもりだったのに）

以上のことから、⑥稲美の非文末の「ベシ」は、言及している事態（行為）が未実現で、一人称動作主体がその事態を実現（遂行）する意志をもっていることを聞き手に示す意味を担っていると考えられる。特徴としてはこの他に、「行くベシだった」のように「ベシ」を素材化[6]・過去化する「ダッタ」が後接することや、前件で「ベシ」によって未実現事態（行為）に言及するが、接続助詞「けど」「のに」をとって、実際は実現（遂行）しなかった、あるいは実行（遂行）できなかった旨の後件が続くことが挙げられる。これらの特徴については、さらなる記述的研究をすすめる

必要がある。

### 3.3. 終助詞的用法の有無

#### 3.3.1. ⑥稲美の文末の「ベー/ベシ」

唯一の西日本の例である⑥稲美には、意志のモダリティ形式「ウ/ヨウ」に後接する、付加が随意的な「ベー/ベシ」がある。3.1.で触れたように、この「ベー/ベシ」は専ら（15）のように意志のモダリティ形式「ウ/ヨウ」とのみ共起し、判断のモダリティ形式とは共起しない。

(15)〈意志〉 あっちへ行コウ {ベイ/ベシ/φ}。(あっちへ行こう)

(16)〈推量〉*明日はたぶん雨が {降ロウベシ/降ルヤロウベシ}。(降るだろう)

また、意志を表明する文脈であっても、「ウ/ヨウ」以外の形式とは共起しない。

(17) *（私は）あっちへ行ク {ベイ/ベシ}。

(18) *（私は）あっちへ行きたい {ベイ/ベシ}。

(19) *（私は）あっちには行かない {ベイ/ベシ}。

この文末の「ベー/ベシ」は独り言でのみ使用できる形式であり、その発話が聞き手めあてではないことを示す機能をもっている。

(20) 〈独り言で〉あっちに行こう {ベシ/ベー}。

(21) #〈聞き手に〉（私は）あっちに行こう {ベシ/ベー}。

さらに、⑥稲美の被調査者は「行こうっと。」のような意志の表明に使用される形式「～っと」は使用せず、これを方言翻訳すると「行コウベー」になると回答している。また（22）のように、「ベー/ベシ」は「どうしよう」と共起しない。文末詞「～かな」は「どうしよう」と共起することから、表明した意志に変更の可能性があることを含んでいるといえるが、⑥稲美の文末の「ベー/ベシ」は「～っと」と同様、表明した話し手の意志に変更の可能性がないことを示す形式だといえる。

(22) *あっちへ行コウベシ、どうシヨウベシ。

(23)　あっちへ行コウカナ、どうシヨウカナ。

また、申し出用法、勧誘用法、やわらげた命令の用法には「ベー/ベシ」は使用されない。

(24)　〈意志〉〈独り言で〉もう寝ヨウ　{ベシ/ベー}[7)]。

(25) #〈申し出〉〈聞き手に〉どれ、かしてごらん、私が開ケテミヨウ　{ベシ/ベー}。

(26) #〈勧誘〉〈まだ起きている孫に〉さあ、爺ちゃんと一緒に寝ヨウ　{ベシ/ベー}。

(27) #〈やわらげた命令〉〈まだ起きている孫に〉○○ちゃん、もう寝ヨウ　{ベシ/ベー}。

### 3.3.2. ①喜多方の「ベー」の終助詞的用法

⑥稲美以外の方言には、他の真正モダリティ形式と共起する特徴をもつ「ベー」はない。しかし用法を詳細にみていくと、意志・推量表現とは考えられない用例が①喜多方にわずかながら認められる。以下の例を見られたい。

(28) a：アレ　アノ　ホラ　アレツケタンダベ　センサーツケデイグドー　オグドナンベサー　ユギフット　ナリッパナシダッタベ（あれ、あの、ほら、あれを付けてるだろ、センサー（障害物感知センサー）をつけて行くと、おおごとになるんだよ、雪が降ると鳴りっぱなしだったんだよ）

b：〈笑いながら〉アー　ソー（ああ、そう）

a：ダガラ　トメネト　アンマ　ユギ　フッテット（だから止めないと、あんまり雪が降ってる場合は）

この用例は老年層ではなく20〜30歳代の談話から得たものである。ここ

では、聞き手が知らない話し手自身の経験について、話し手が情報を一方的に聞き手に与えている。よって、話し手自身の経験という確定情報を話し手が持っている点でここに推量という心的活動を行う余地はなく、これらの「べー」は（a-1）推量用法とも（a-2）確認要求用法ともいえない。こうした用例は、老年層の談話にはわずかしか観察されなかったが、面接調査において被調査者が標準語文を方言翻訳する際、文末詞「～よ」を「～べー」に置き換えるとのコメントがあった[8)]。

井上（1985）は、「べー」が用言終止形に後接するという接続の単純化に関して「終助詞化」を指摘しているが、(28) などの「べー」の用法については、用法面における従来の枠からの逸脱をも指摘できよう。⑥稲美の場合は、「ウ/ヨウ」など他のモダリティ形式との関係から「べー」の用法が制限された結果、「べー/ベシ」のもつ意味が変えられるに至ったと考えられるのだが、これとは対照的に、「べー」が現在も頻用されている①喜多方においてこのような用法が生じていることは注目に値する[9)]。

## 4. まとめ－各方言の「べー」の用法にみられる変化傾向－

西日本にも多義の「ベシ」が広く用いられていたことを文献から検証できることとして前提にする[10)] と、上記のような現在の方言形式「べー」の用法の変化傾向としては以下の《Ⅰ》《Ⅱ》が考えられる。

**【「べー」の用法の変化傾向】**

《Ⅰ》：意志・推量表現の形式分化に関わる変化傾向

《Ⅰ-ⅰ》職能非分化型：推量・意志の両表現を「べー」が担う。（①喜多方、②鳴瀬、③大館）

《Ⅰ-ⅱ》職能分化型：「べー」が推量表現または意志表現のどちらかの専用形式である。（④五城目、⑤沼津、⑥稲美）

《Ⅱ》：意志・推量表現以外の用法への変化傾向

《Ⅱ-ⅰ》汎用型：「ベー」が意志あるいは推量の用法をもったまま、意志あるいは推量以外の用法をも担う。(①喜多方)

《Ⅱ-ⅱ》職能移譲型：意志・推量の用法は他のモダリティ形式に移譲し、「ベー」自体はその真正モダリティ形式と共起関係をもって意志・推量以外の意味を担う。(⑥稲美)

ただし、こうしたパターン化には多くの問題がある。特に、今回調査した地域の方言が通時的には確認しづらいものであるため、これらのパターンはあくまで共時態における用法の対照から抽出したものににとどまり、体系の変化過程に立ち入ることは困難である。

《Ⅱ-ⅱ》については、木川（1980）の八丈島の報告にも、以下のような例が挙げられている。

(29) オマエガ　カッターバ　コレイ　ケロウベイ（おまえが勝ったらこれをやろう）

(30) オマエガ　イカバ　アイモ　イコウベイカノウ（おまえが行くなら私も行こうかなあ）

こうした用法は八丈島でも八丈町三根の老年層（「ベイ」に推量、勧誘用法はない）にだけみられるものであり、樫立などでは「ベキャ」という形式が推量のみに使用され、この場合は他形式に後接することなく用言連体形に後接するという。こうした事例から、意志表現形式としての「ベー」はより文末に移動しやすく、他形式に意志の意味を移譲して「ベー」自体は随意的なものに変わりやすいという傾向があると考えられる。

また、京都市・相生・大垣・神戸・大阪（阿倍野区）などにも⑥稲美にみられた非文末の「ベシ」の用法が老年層にあるという情報（使用者を親にもつ世代の内省も含む）から考える[11]と、非文末の「ベシ」の用法はかつて近畿一円に広がっていたものと考えることができよう。ただし、こ

うした「ベー/ベシ」の出自は定かではない。接続の点からは古典語の助動詞「ベシ」を保存したものとはいいづらく、また音声的にも「ベキ」が「ベシ」に変化したとは考えにくい。さらに、これらの地域の「ベシ」が⑥鳴瀬と同様に当為の意味を含まないかどうかは定かでない。ある時点で文章語の「ベシ」を取り込んだ後、男女ともにカジュアルな場面で使用する形式となったということも考えられるので、近畿周辺の各地でも使用されているという情報もふまえ、改めて追究したい。付け加えるならば、⑥稲美の「ベー/ベシ」に限らず近畿一円の「ベシ」はすべて老年層がわずかにその使用の形跡を残しているに過ぎず、今は消滅の途にある。

今回とりあげた「ベー」と他形式との関係も、各方言ごとに見ておかねばならない重要な課題である。

**注**

1) 本稿では、「ベー」の短呼化・長呼化や半濁音化、ならびに直前の要素の撥音化・促音化などの音声的なバリエーションは意味的に使い分けがない限り捨象し、一括して「ベー」と表記している。

2) 文脈1（推量表現）には国立国語研究所（1989）のうち第112、113、114図を、文脈2（意志表現）には国立国語研究所（1989）の第106、107、108、109、110、111図を参照した。なお、国立国語研究所（1989）は主に活用をみるためのものであり、文脈3（勧誘表現）に相当する図がないため、文脈3（勧誘表現）には国立国語研究所（1979）の第20図を参照した。

3) 中島（1972:125）に報告があるが、本稿本文中の⑥稲美の用例はすべて1997～1998年に行った通信調査によって確認したものである。

4) 動詞の活用形の命令形とは別に、勧誘を表す形式が、動作主体として話し手を含まないことで派生的に命令を表すという用法。仁田（1991:213）にしたがって「やわらげた命令」と呼ぶ。なお、「ベー」のやわらげた命令に相当する用法については、既に玉懸（1997）（1998）が仙台市および宮城県加美郡中新田町における使用状況を報告している。

5) ただし、中島（1972:125）には以下の（31）（32）が例示されている（用例は原書のまま）。いずれも再帰代名詞「自分」が動作主体となっている。

(31) それは自分が取るべしやったんや。

(32) 自分が見るべしできたんやろ。

6) なお、「ベシ」が名詞的に（コトガラとして）扱われることはない。

(33) *その講演会には行くベシはないよ。(行くつもりはないよ)

また、以下のように意志表現とはいえないものには使用できない。

(34) *ああ、そのことならちょっとぐらいは知ッテルベシだけど。(知っているつもりだけど)

(35) *そのろうそくはさっきちゃんと消シタベシだったんだ。(消したつもりだったんだ)

7) 中島（1972）では、一段動詞の意志表現形式として「寝ロウ」などのラ行五段化した形式が示されることが少なくない。しかし1997～1998年の調査において、現時点ではラ行五段化した形式はほとんど使用しないとの回答を得、また「ベー/ベシ」の記述には影響がないと判断したことから、本稿ではこれらの形式を省略している。

8) なお、今回採録した談話のなかでは、以上のような「ベー」の用法は①喜多方においてのみ観察されるにとどまった。談話という資料の性格上、「出てきたもの」という偶然性に結果を左右されないために、面接調査で網羅的に確認することが不可欠となるが、それは今後の課題としたい。また用法の詳細や、他地域の中年層・若年層の使用状況の確認なども、すべき作業として残っている。

9) 瀧川（1998）は、宮城県加美郡中新田町の中年層・若年層において、推量・意志の用法に他形式が発達してきた結果、推量では確信の強い推量に、また意志では勧誘表現形式へと、相対的に用法を狭めて専用化しつつあることを報告している。こうした用法の変化（年代差）が、本稿で取りあげた地点にも当てはまるのかどうか、今後確認していく必要があるだろう。

10) 山内（1989:264-265）には、安芸石見地方を中心に謡われた中世的な性格を持つ歌謡『田植草紙』に、推量表現として「う」「らう」「べい」、および当然の意味として「べし」が使用されていることが報告されている。この「べい」「べし」は「らう」と同様、文体的に堅苦しいものではないという。また、國語調査委員會（1917:128）にも、「諸国盆踊唱歌」の豊後と肥後の「ベー」の例があげられている。これらは、古いことばを保存しやすい歌謡の性格上、記録された時点で既に古い形式だったことも考えられるため時期の特定はできないが、西日本でかつて広く「ベー」が使用されていたことを示すものといえよう。

11) ここで挙げた事例については、中井（1997:37)、および久野マリ子（相生)、

久野眞（大垣）、久木田恵（神戸）、武田佳子（大阪）の各氏にご教示いただいた。

**引用文献**

井上史雄（1985）「現代東日本のベイの分布と変化」『新しい日本語 ── 《新方言》分布と変化 ── 』明治書院

木川行央（1980）「八丈島方言の推量表現」東京都立大学国語学研究室『八丈島方言の研究』

國語調査委員會（1917）『口語法別記』

国立国語研究所（1979）『表現法の全国的調査研究 ── 準備調査の結果による分布の概観 ── 』

国立国語研究所（1989）『方言文法全国地図』第3集

瀧川美穂（1998）「「べー」の年代差」文部省科学研究費補助金基盤研究（B）「宮城県における伝統的方言体系の記述とその変容についての研究」研究成果報告書『宮城県中新田町方言の研究』

玉懸元（1997）「仙台市方言における「べー」の用法について」東北大学文学部卒業論文（未公刊）

――――（1998）「「べー」の用法」文部省科学研究費補助金基盤研究（B）「宮城県における伝統的方言体系の記述とその変容についての研究」研究成果報告書『宮城県中新田町方言の研究』

中井幸比呂（1997）「Ⅱ　府下各地の方言」平山輝男編『日本のことばシリーズ26　京都府のことば』明治書院

中島信太郎（1972）『播磨加古郡北部方言記録』武蔵野書院

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

山内洋一郎（1989）『中世語論考』清文堂出版

（大学院後期課程学生）